

# 「皇朝輿地全図」と『日本誌』所収日本図について-原図を求めて-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2009-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岩井, 憲幸 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/5078">http://hdl.handle.net/10291/5078</a>

## 「皇朝輿地全図」と『日本誌』所収 日本図について——原図を求めて——

岩 井 憲 幸

はじめに 『北槎聞略』には1帖, 9舗, 計10点の地図が添えられているが, この中のひとつ「皇朝輿地全図」はきわめて興味ぶかい日本図である。この地図については従来あまり問題とされたことがなく, なによりもその原図が確定されていない。筆者も原図の確定とその出現を最終的に望むものであるが, これらの一助となるべく, ここに筆者の調査からえたひとつの仮説を述べておきたい。

1 「皇朝輿地全図」 本図(以下Kと略称する。写真4参照。)は国立公文書館内閣文庫に蔵される『北槎聞略』に含まれるが<sup>(1)</sup>, その書誌的事項は次の通りである。

装釘 折仕立装

大きさ 縦48.6 cm, 横73.2 cm

品質形状 紙本著色

料紙 楮紙

表紙 鳥の子

題箋 貼り題箋, ひとえ枠中に〈皇朝輿地全図 魯齊亞国人製〉とあり。

印記 左下枠外に〈浅草文庫〉(長方朱印), 図内中央左上に〈日本政府図書〉(方朱印), 図内右下隅に〈内閣文庫〉(方朱印)。

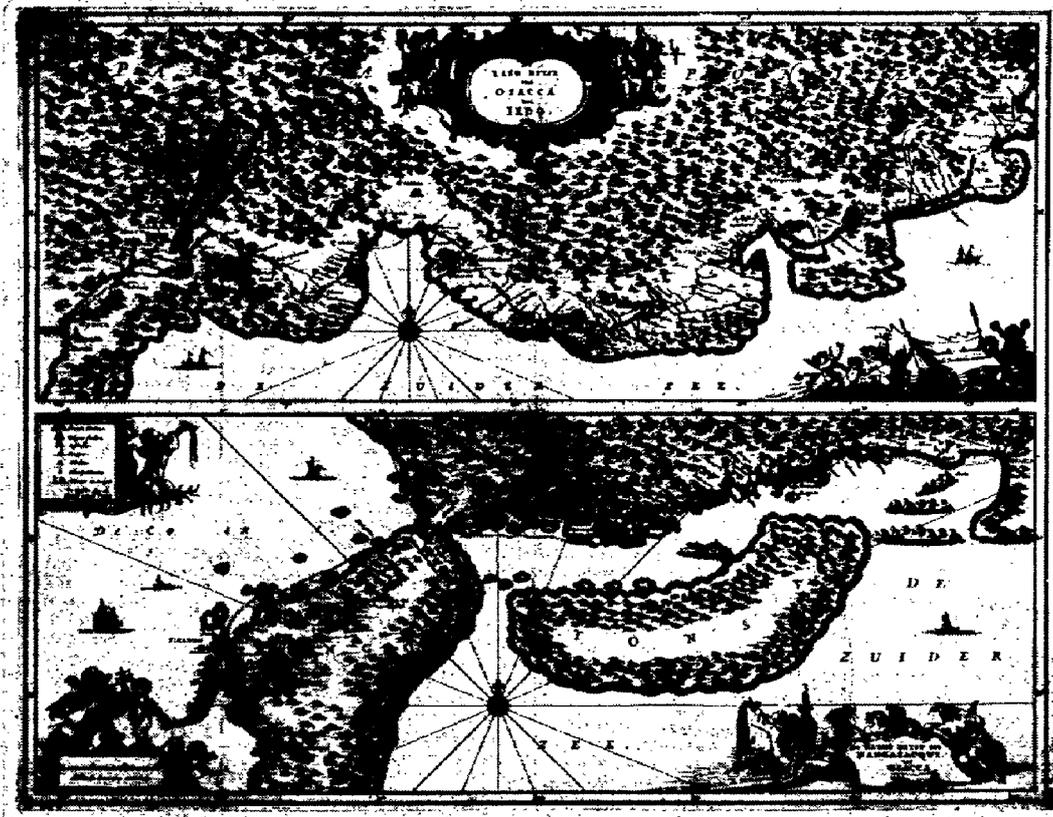


写真1. 1669年アムステルダム刊モンタヌス『日本誌』所収〈長崎から大坂への海路図〉(下)と〈大坂から江戸への陸路図〉(上) (早稲田大学図書館蔵)

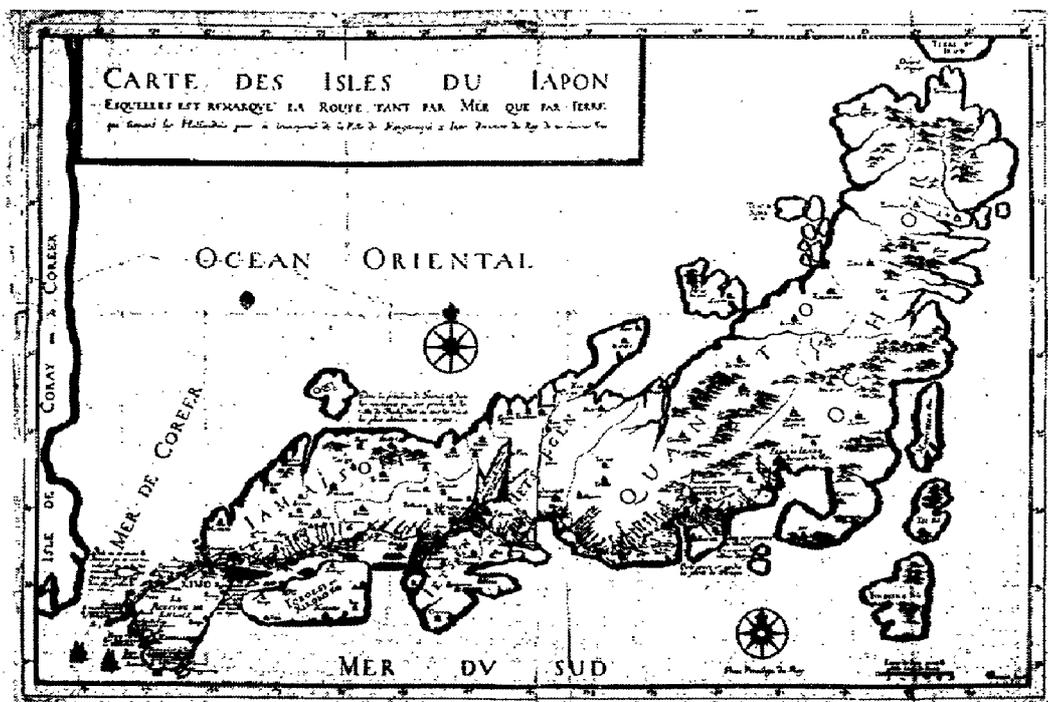


写真2. タヴェルニエ『航海誌』第3巻所収日本図 (1680年本。ライデン大学図書館蔵)

Fig. 2. General map of Japan, J. B. Tavernier, *Les six voyages...*, 1680, Leiden University Library, Leiden.



写真3. 1768年刊『日本誌』(第2版)所収日本図(早稲田大学図書館蔵)



写真4. 『北槎聞略』附図「皇朝輿地全図」(原図1786年製, 1794年写。国立公文書館内閣文庫蔵。重要文化財)

第1の印記がある図の左端枠の外側の白地が、右端枠のそれに比して大きい。図全体の彩色は美しく、海の部分もうすく青に塗り、陸地を朱でふちどる。蝦夷は一部のみがみえ、本州は太く、九州が四国ほどの大きさに異様に小さい。左はじに朝鮮島（半島とは考えられていなかった）の一部がみえる。各地の都市は洋風の建物を朱で描いて示し、そのもとにロシア文字による地名、ときには短い説明文が付される。ロシア文字のあるものには朱で読みあるいは対応の地名がそえられる。使用されるロシア文字は概して4種であり、大文字の花文字・筆記体大文字・同小字および細字である。すべてにおいてふつうの筆記体のように続けざまに書かれておらず、一字一字を区切って書いている。筆記体はイタリック風で、細字はやや粗雑な感じであって草書体に近づいている。ロシア語短文は空間をとらずに連綿と書き込まれ、ほとんど分ち書きとはいえない（他の細い点については後述する）。凡例やスケールは存しない。カルトゥーシュは、左上隅に元来なにかがあったためか、図の上中央よりやや左寄りであって、両端を巻いた青リボンの中央部（白地）には次のようにロシア語6行のタイトルが書かれている。綴り・アクセント符・省略符さらに上書きはそのままとし、分ち書きで引用するが<sup>(2)</sup>、この一文は重要なので逐語訳を付しておく。

**Кар'та острововъ Японскіхъ внѣйже означенъ || Путь, какъ морѣмъ, такъ и сухимъ путѣмъ || егоже Галан'цы употребляютъ, въ проездѣ || своемъ, изъ града Нангасаки, въ городъ || Иедо, гдѣ живѣтъ Король, оныхъ ост = || рововъ, сочинѣна. 1786 года Маія. дня.**

〔日本の島々の地図。その中にはオランダ人たちが長崎の町からこの島々の王が住んでいる江戸の町への旅で利用する海路も陸路も示されている。1786年5月日に作製される。〕

文末の〈1786 года Маія. дня.〉の〈Маія. дня.〉は、おそらく目による錯覚からの誤りで、〈Мая. 1 дня.〉と考えられる。そうであれば〈1786年5月1日〉製作ということになるであろう。

『北槎聞略』巻一凡例によれば、Kを含む地図はすべて、ロシア遣日使節や光太夫自身が将来した地図の模写であるという。桂川国端は次のように言う。(ルビは省略する)

一凡地理を弁じいふことは〔中略〕よつて石川忠房村上義礼等が上るところ漂人等か齎し来りたる輿地図若干を模写し地名を訳するに国字を以てし此編に附して其国の方位形勢を著す〔下略〕

この模写がほぼ正確になされたとみなせば、カルトゥーシュの記載から、Kの原図は1786年ロシア製の日本図ということになる。K表紙題箋の〈皇朝輿地全図 魯齊亜国人製〉はこれを簡便に言い換えたものともとれるが、一方では当時Kの原図につきどれほどの理解がなされていたのであろうか。

**2 Kの特異性** Kが『北槎聞略』附載の他の地図とは性質がことなっていることは早くから指摘されている<sup>(3)</sup>。亀井高孝は自著『北槎聞略』(昭和12年)の解題に次のように書く<sup>(4)</sup>。(数字はアラビア数字にかえた)。

さて所載の皇朝輿地全図は魯齊亜国人製の註があつて1786年の作によつたものであり、全部ロシア文字で日本の地名が記され日本字がそれに傍記されてゐる。然るに此図は17世紀中頃デュラン(Durant)が製作し、1679年タヴェルニエ(Tavernier)の著 *Recueil de plusieurs Relations* 中に縮写所載された日本図そのままの復刻であつて、何等新意を加へた迹を見ず、しかもそれは耶蘇会士の製図に拠つた不精確なものに属してゐる。而してその後100年間における地理上の知識の進歩はダンヴィル(d'Anville)の地図その他によつても明らかであるのに何故にこんな時代離れのしたものが18世紀末極東に関心が強まつた当時にロシアに流布して居つたのであらうか。

ここではKがTavernier日本図のそのままの復刻であること、当時すでにヨーロッパ世界では時代遅れであったTavernier日本図がこの時期のロシアに刊行・流布していたことの不思議さを語っているわけだが、これらの意見

はその後の〈解説〉でもひきつがれる<sup>(5)</sup>。後者の問題については今しばらく措くとして、前者の問題はいかがであろうか。この場合、そのままの復刻とはどのような意味であろうか。Tavernier 日本図が K の直接の原図ということであろうか。Tavernier 日本図は元来フランス語でカルトゥーシュや地名等が表記されており、一方 K はそれらがロシア語でなされている。さらに桂川の凡例から、K はロシアからの将来図の模写であることが明言されている。すると、まず K が模写されたもとの図 (= 将来図) はロシア語のものであったはずである。この図は Tavernier 日本図のロシア版ということになるであろう。

ここにこの将来図にはほぼ直結する日本図が存する。すなわち、ペテルブルク刊『日本誌』所収日本図がこれである。ただし筆者が見るをえたのは早稲田大学図書館所蔵の同第 2 版所収日本図である。(写真 3 参照)<sup>(6)</sup>。

高野明は早くこの『日本誌』を紹介し、ついで所収日本図を示して見せた<sup>(7)</sup>。この図が K および K の原図と密接な関係を有することは、だれの目にも明らかである。しかし残念なことに細部についての観察ないし意見は述べられなかった。

3 『日本誌』『日本誌』所収日本図について語る前に、『日本誌』自体について述べておく。

早稲田大学図書館所蔵第 2 版 (1768 年) によれば、タイトル等は次の通りである。

Описание о Японѣ, содержащее въ себѣ три части, то есть: Извѣстіе о Японѣ и о винѣ гоненія на христіянѣ, Историю о гоненіи христіянѣ въ Японѣ и Послѣдованіе странствованія Генрика Гагенара, которое исправною ландкартою и изрядными фигурами украшено, напечатано вторымъ тисненіемъ. Въ Санктпетербургѣ, При Императорской Академіи Наукъ, 1768 года.

[3部よりなる日本誌。すなわち、日本についておよびキリスト教徒迫害の原因についての報知、日本におけるキリスト教徒迫害の歴史、ヘンリク・ハーヘナールの旅行記抄。[本誌は]正確な地図[単数]と見事な挿図[複数]によって飾らる。第2版。サンクトペテルブルクにて帝室科学アカデミーにより1768年。]

[ ]内は意味をとるための逐語訳だが、ここからも窺えるように本書はタヴェルニエのいわゆる『航海誌』(Les six voyages de Jean Baptiste Tavernier, [...] Paris 1676-79, 3 vols. 後述)第3巻<sup>(8)</sup>中の日本記事と、フランソワ・カロンの著、ヘンドリック・ハーヘナール補注の「日本大王国志」(Beschrijvinghe van het machtigh Coninckrijk Japan, [...]. 初出は1645年)<sup>(9)</sup>の旅行記を翻訳抄録したものである(むろん露訳が何版によるかいま詳らかでない)。内容については高野明に譲るが<sup>(10)</sup>、初版のタイトルは次に示すように第2版とややことなり、第2版では本文中に示されている編訳者が明示されている。メジョフから引用する<sup>(11)</sup>。

Описание о Японѣ, содерж. въ себѣ: извѣстіе о Японѣ, и о винѣ гоненія на христіанѣ, въ Японѣ, и послѣдованія странствованія Г. Гагенара; Ф. Карона, С. Коровинъ—Симбиренинъ и И. Горлицкій; съ картою и фигурами. Спб. 1734.

[日本誌。日本についておよび日本におけるキリスト教徒迫害の原因についての報知、H. ハーヘナール、F. カロンの旅行記抄からなる。S. コロヴィン=シムビレニンおよびI. ゴルリツキー。地図[単数]と挿図[複数]付き。サンクトペテルブルク、1734年。]

初版は第2版より34年前に刊行され、第2版同様8折版で、値段は10ルーブルだったらしい。Библиография Японии<sup>(12)</sup>によれば、さらに初版の構成が判明する。第1部は〈日本についておよびキリスト教徒迫害の原因についての報知〉で101ページからなり、地図(単数)を有し、コロヴィン=シムビレニン訳。第2部は〈キリスト教徒迫害の歴史〉64ページ、第3部は〈ヘンリク・ハーヘナールの旅行記抄〉166ページで、ともにゴルリツキーの訳である。挿図については数も場所も言及がない。第2版は初版同様

8折本<sup>13</sup>であり、部立ても同順・同様であるが、第1部が128ページ、第2部が62ページ、第3部が163ページとややページ数がことなっている。早稲田大学図書館所蔵の第2版によれば、地図は1枚、挿図は4枚であり、これらの数はメジョフの第2版に対する記事末の〈銅版日本列島図〔単数〕と〔……〕4枚の銅版画つき<sup>14</sup>〉という記述に一致する。ただし、同館蔵第2版における地図・挿図のうち地図と挿図1枚は本来の場所に挿入されていない。後人による誤りであろう。地図は現在第1部8-9ページ間に貼りつけられてあるが、同図内の指示に従えば第1部1ページに位置するべきである。また挿図〈日本兵士像〉(仮称)は現在タイトルページの前に貼りつけられているが、本来は第1部38-39ページ間にあるべきものである。39ページのど部分にその痕跡がのこる。

第2版3-4ページには〈読者へ〉という一文があって、これに続く第1部の内容がタヴェルニエ『航海誌』に依っていることを述べている。さらに、同8ページ末から9ページ初めにかけて〈日本の国内で作図された、きわめて正確と認められる地図を本書に付して、読者の参考に供する<sup>15</sup>〉と述べていることから、付されたこの地図がタヴェルニエに附載された日本図の一種の転載であろうことは容易に想像される。(なお、ちなみに同館蔵第2版の地図は本文に従ってこの位置8-9ページ間に貼りかえられている)。

『日本誌』初版所収の地図と同第2版所収のそれとが、同じであるか異なっているかは、残念ながら分からない。『日本誌』初版は天理図書館に1本蔵されているらしいが、地図は脱落しているもようである<sup>16</sup>。ともあれ、しかしながら両図間に大きな異なりはさほどなかろうとみて、第2版の地図によって論を進めようと思う。

4 『日本誌』所収日本図とタヴェルニエ日本図 早稲田大学図書館の蔵する『日本誌』第2版に含まれる日本図(以下Wと略称する)に立ちかえる。Wの大きさは図の枠の外側で縦21.1 cm 横31.6 cm 前後である。したがって

本には折り込まれて入っている。銅版によるもので無色である。ロシア文字による地名・短文が随所にみられる。活字体・イタリックの大文字、イタリック小文字が目立つ。右上隅枠外にイタリックで〈Стр : 1. [1 ページ]〉と、折込みの場所が指示されている。

カルトウーシュは左上方にあって、次のような一文（全4行）が書かれている。第1行は活字体大文字大字（一部イタリック使用）、第2行は活字体大文字中字、第3・4行はイタリック（大文字・小文字併用）だが〈江戸〉のみ活字体大文字を用いている。いま原文のまま引用するが、イタリックは活字体に変更した<sup>69)</sup>。

КАРТА ОСТРОВОВЪ ЯПОНСКИХЪ || ВНЕИЖЕ ОСНАЧЕНЪ  
 ПЪТЬ ІАКО МОРЕМЪ ТАКО ІСЪХИМЪ ПЪТЕМЪ || егоже Гол-  
 ландцы употребляютъ въ проѣздѣ своемъ Ісграда Нангасаки вгородъ  
 || ІЕДО гдѣ живеть Король оныхъ острововъ.

〔日本の島々の地図。その中にはオランダ人たちが長崎の町からこの島々の王が住んでいる江戸の町への旅で利用する海路も陸路も示されている。〕

このタイトルは、やや古めかしい書体や単語・綴りで書かれているものの<sup>69)</sup>、Kのカルトウーシュ内のタイトルと基本的に一致するとみてよい。大きな違いはKが年紀を有し、Wはこれを有さない点である。Kの直接の原図である将来図あるいはもとの図（以下Oとする）は1786年製であり、一方Wは1768年、Wの初版は1734年である。光太夫の漂流は天明2年（1782）の出来事であったが、翌年アムチトカ島へ漂着し、ようやく天明7年（1787）9月シベリア本土のカムチャツカに移る。したがって、時間的にはOもWもその初版の地図も、光太夫シベリア移動の前の出来事である。この点は確認しておく必要がある。

ここで翻って、タヴェルニエ日本図について軽くふれたい。前述したように、本図はタヴェルニエ『航海誌』全3巻のうち第3巻中に付図としてはさまれているものである。『航海誌』初版はもとより稀観書であるが、ライ

デン大学図書館の貴重書室ドゥーサで筆者が手にした初版本では日本図が脱落していた。幸い初版より1年後刷りの1680年刊第3巻に地図が保存されていた。1年後刷りといっても、増刷のようで、大きさや装釘等はまったくかわらず、しかもこの本はアムステルダム東インド会社の旧蔵本であったらしい。このドゥーサ蔵のタヴェルニエ日本図（以下Tとする）を筆者のノートに従って、瞥見してみる。（第2図参照）

Tは紙の大きさが縦55 cm 横83 cm 位であった（枠内の計測はできなかった。諸書でタヴェルニエ日本図の大きさを51.5×76.5 cm とする）。したがって、TはKよりもやや大きめである。紙2枚をついだものを1紙とし、銅版無色である。カルトゥーシュはW同様左上方にあり、その形は方形である（Wも同じ）。Compass roseは上下に1つずつ計2ヶ所、後者の下に〈Auec Priuilege du Roy [王の允許をえて]〉とある。図右下隅近くに scale（30迄標示）があり上に〈Lieües du Iapon ensemble || petites Lieües de France [日本の里はフランスの小さい里にあたる]〉とある。さらに右下隅に〈Durant fecit [デュラン作]〉と銅版製作者の名をしるす。九州沖には洋風帆船2艘が図示されている。

さて、カルトゥーシュにはやや古いフランス語でタイトルが次のようにある（全3行）<sup>69</sup>。

CARTE DES ISLES DU IAPON || ESQUELLES EST REMARQVE' LA ROUTE  
TANT PAR MER QUE PAR TERRE || que tiennent les Hollandois pour se  
transporter de la Ville de Nangasaqui a IEDO demeure du Roy de ces  
mesmes Isles [.]

[日本の島々の地図。その中にはオランダ人たちが長崎の町からこの同じ島々の王の住居である江戸へ赴くためにたどる海路も陸路も示されている。]

このフランス語タイトルは、内容もまた措辞の点からもWのロシア語タイトルとまず同じといってよい。

TとWを概略的に比較してみる。図全体に関しても、日本列島とその付

属の島々および朝鮮島の形状につき、TとWは一致する。点線で示された長崎から大坂を経て江戸に至る蘭人参府の経路と経由の町々の地名も両者に存する。さらに20ヶ所あまりに付された短文による説明もともにある。同じく海洋名も3つある。また、数ヶ所にみられる金・銀山の文字による注記も一致する。町を示す城型のマークもほぼ同一である。経度はTでは、下枠で170から184が、上枠で168から186が標示され、緯度は左右枠でとも

	T	W
①朝鮮島	ISLE DE CORAY ou de COREER	Островъ Кораї или Кореерь
[日本]		
②シモ, 西国王国 (九州)	XIMO    LE ROYAUME DE    SAIKOCK	XIMO    КО-   РОЛЕВСТ.    САЙКОКЪ
③四国島	TOKOESI ou    XIKOKO Isle.	ТОКОЕСІ или    УІКОКО остр:
④山城	IAMAISOIT	IAMAICOIT
⑤越後	IETSEN	IETSEN
⑥越前	IETSEGEN	IETSEGEN
⑦関東	QUANTO	КВАНТО
⑧奥州	OCHIOR	OXIOP
⑨蝦夷地	TERRE DE IESSO	ЗЕМЛІА ІЕС-    СО
⑩津軽海峡	Destroit de Sangaar	Пролива(sic) Сангарь
⑪長崎	NANGASACQUI	Нангасаки
⑫平戸	FIRANDO	Фірандо
⑬大坂	OSACCA	Осака
⑭ミヤコ(京)	MIACO ou    MEACO	Міако или    Меако
⑮尾張	OWAERI	Оваери    Воуври
⑯江戸	IEDO ou IENDO	ІЕДО или ІЕНДО
⑰松島	MAICUXIMA Isle.	МАІКЪУІМА
[海洋]		
⑱東方洋(日本海)	OCEAN ORIENTAL	ОКІАНЪ ВОСТОЧНЫИ
⑲朝鮮海(東シナ海)	MER DE COREER	МОРЕ    КОРЕЕР(sic)
⑳南海(太平洋)	MER DV.SUD	МОРЕ ЮЖНОЕ

\* 地名の〈山城・越後・越前〉はそれぞれ今日いうそれらの場所とは一致せず、Tでの位置は〈山城〉が中国地方に、〈越後〉が近畿から紀伊半島あたりに、〈越前〉は中部地方に配されている(存疑)。WもTをひきつく。

\*\* ロシア文字のうち、〈У・V・8〉は古い字体でそれぞれ [ks][w][u] の音を表わす。

に32から40が標示される。Wの場合、経度は下枠で170から184、上枠で169から185であり、緯度は左右枠ともに32から40である。上枠経度の標示で両端の168と186が示されていないが、TとWの緯度と経度の標示も同一と判じてよい。以上からTとWは同図と結論づけられる。

参考のため、大きな地名等につき、TとWでの表記を並記して掲げておく。第1欄は説明のための仮りの直訳であり、かっこ内に現代名を示す(上表参照)。

次に説明の短文と金・銀山の注記を例示しておく<sup>69</sup>。例文末に逐語訳を付す。(パンクチュエーションは原文のまま)

### 1 [平戸]

T : Ce lieu estoit autrefois || la premiere demeure || des Hollandois  
[この場所は昔オランダ人たちの最初の住居だった。]

W : Первое жилище || голландцев || [オランダ人たちの最初の住居]  
(sic) (sic)

### 2 [対島?]

T : L'Isle ou on envoie la || jeunesse, qui ne veut rien || valoir et ou  
on les fait || travailler par || force, jusque a ce que || leurs plus  
proches, les en retire~ [ろくなことをしない若者が送られる島、そこ  
では親類たちがひきとるまで、彼らは強制的に労働させられる。]

W : Островъ в которой высылают || молодыхъ дѣтей ко<sup>T</sup>рые || не  
хотятъ работати, || гдѣ принуждаютъ ихъ || работати силою ||  
до тѣхъ мѣстъ || дондеже || ихъ ближнихъ || сродниковъ кто ||  
ихъ восметъ [働こうとしない若者たちが送られる島、そこでは親類  
の誰かがひきとるまで、彼らは強制的に労働させられる。]

### 3 [琵琶湖]

T : Ce Lac a 18 Lieues de || long, on y pesche quantité || de Sau-  
mons [この湖は長さ18里で、大量の鮭がとれる。]

W : Cіe Озеро 18 Миль || длины і доволно || внѣ Семги [この湖は長さ18マイルで、そこに鮭がたくさんいる。]

4 [岡崎]

T : Cest ou || sont les plus bells || femmes du païs. [ここが国中でもっとも美しい女性たち<sup>ら</sup>がいる所だ。]

W : Окась Гдѣ лутчі поль || женскіи [岡崎、ここに最上の女性がいる。]

5 [富士山]

T : Fusino amma || montagne toujours || couuerte de || neige [富士の山、いつも雪におおわれている山]

W : Фѳзіно амнѣ (sic) Гора всегда || покрыта снѣгомъ [富士の山、いつも雪におおわれている山]

6 [因幡]

T : Dans la prouince de Iamaïsoit, dans || les montagnes, qui sont proche de la || Ville, de Inaba: Cest ou sont les mines, || les plus abondantes, en argent~ [山城地方の中、因幡の町に近い山々の中、ここが銀のもっとも豊富な鉱山 [複数] がある所だ。]

W : Впровинціи ямаісоіть близь Города || инаба имѣются вгорахъ преизобилѣи-||щія серебряныя рѣдокопства [山城地方の中、因幡の町の近く、山々の中にもっとも豊富な銀の鉱山 [複数] がある。]

7 [坂東]

T : Dans ceste prouince || de Bandel || il y a aussi des || mines d'argent [この坂東地方にも銀の鉱山 [複数] がある。]

W : Всей провинціи || Бандел имѣется || руды || серебряная [この坂東地方には銀鉱石 [複数] がある。]  
(sic) (sic)

8 [仙台]

T : Mines || d'or [金鉱山 [複数]]

W : слатая руда [金鉱石 [単数]]  
(sic)

Tにつき付言する。地名の綴りはキリシタン系資料に基づいているため、たとえば、〈キ〉〈ケ〉〈シ〉〈セ〉〈ツ〉はそれぞれ〈qui〉〈que〉〈xi〉〈xe〉〈tçu〉の表記を起原とする。

例：T [伯 耆] FOQUI  
[上 野] CONZUQVE  
[山 城] YAMAXIRO  
[仙 台] XENDAI  
[津ノ国] TCVNOCUNI

これらはWではそれぞれ〈Фоки/Конзъкь/Ямауиро/Уендаи/Ткэннокэни〉とほぼ機械的に翻字され、したがっていっそう地名がわかりにくくなっている。また、次例は元来〈s〉の小文字のヴァリエント〈r/l〉を誤って〈l〉あるいは〈i〉と読んだために生じた綴りと解され、これがWへと踏襲されて、ここでは元来の地名からかなりはなれてしまっている。

T [武 蔵]	MVLAXI	cf. W : Мзлауі
[上 総]	CANZVLA	Канзэла
[土 佐]	TOIA	тоя

大ざっぱな言い方が許されるならば、タヴェルニエ日本図は、現在は失われているモレイラ日本図から、フランス日本図、サンソン日本図へと連なるタイプの日本図の中に、モンタヌス『日本誌』に付された参府のための〈長崎から大坂への海路図〉と〈大坂から江戸への陸路図〉とをほめ込んだものである(写真1参照)<sup>43</sup>。

5 タヴェルニエ日本図の変種とWの原図の推定 かししながら、TとWの相似性がそのまま直接の復刻の関係にむすびつくわけではない。タヴ

エルニエ日本図の初刊は1679年であり、『日本誌』の初版所収図が第2版と同じとしても、その刊年は1734年である。ここに55年の時間差が存する。一方では、タヴェルニエ『航海誌』は世に歓迎されたらしく、初刊本以降18・19世紀から現代に至る迄、フランス語版はむろんのこと独・蘭・伊・英訳本が多数刊行されたという<sup>63</sup>。筆者も何冊か手にしたが、ここで注目しなければならないことがある。すなわち付図の小型化である。たとえば1680年英訳版のそれは<sup>64</sup>縦37 cm 横53 cm ほどで、しかも左上にトンキンの地図がはめこまれた。また1678年パリ刊本（仏語）では、縦21 cm 横32 cm ほどである。

後者の大きさは、Wのそれとほぼ一致する。上では詳述しなかったが、Tで九州沖に描かれた洋風帆船2艘は多く後代の図中にひきつがれ（ただし例えば1680年英訳版は削除）、Wでも同じく九州沖に存する。Wではさらに日本海側で隠岐島の上に2艘、能登沖に1艘、秋田沖に1艘、太平洋側紀伊半島沖に1艘、計5艘の船が描かれている。しかもこれらの船は九州沖の2艘と型がことなり、ジャンク風の帆船である。またWでは、Tと同様、対島から仙台まで説明の短文が20書き込まれているが、そこには1から20の数字が付されている（ただしすべてが完全に読みとれるわけではない）。これらの数字はTには存在しない。カルトゥーシュ内のタイトルは、Tが全3行で、第1行は活字体大文字大字、第2行は活字体大字中字、第3行はイタリック体（大文字小文字併用）であるのに対し、Wのそれらは全4行で、第1行が活字体大文字大字、第2行が活字体大文字中字、第3行と第4行がイタリック体（大文字小文字併用）となっている（〈江戸〉のみ活字体大文字中字）。以上、①船、②数字、③カルトゥーシュの3つの問題がひとつの手掛りを与えてくれるであろう。

上述の1687年パリ刊本の場合、①は計5艘の船がWと同じ場所に存する。ただしジャンク風ではなくすべて洋風帆船である。②の数字はやはり存し、しかも（途中脱落があるが）21迄付されている。③は全4行で、第1行

のみ活字体大文字大字，他の3行はイタリック体（大文字小文字併用）を主とし，2地名〈長崎・江戸〉のみ活字体を使用する。そして興味ぶかいことにこの1687年パリ刊本付図のカルトゥーシュ右わきには，上枠にそってイタリック体で小さく〈III. Deel Fo1. 1. [第3巻，第1丁]〉とオランダ語が存する（これはこの図の綴じ込み場所を指定するのだろう<sup>69</sup>）。これらは一体何を意味するのであろうか。おそらく㊦㊧㊨ともに形式の多少の変更は，版權とのかかわり，あるいは各版の独自性の主張ということでもあろうか。筆者にはこの点につき，知識はない。

しかしながら，㊩の数字の付加はどういうことであらうか。Wの場合，地図中にも本文中にもこの数字を説明する文章が存在しないのである。とすれば，Wの図中の数字は，元来コピーした原図中に存し，Wはこれをそのままもち込んでいるのではなかろうか。

ここにライデン大学蔵の一本，略題紙に〈Alle de || WERKEN || Van de Heer || J. BAPTISTA TAVERNIER, || [...] [J. バプティスタ・タヴェルニエ氏の全著作]〉と題する蘭訳本3巻が存する。4折本で，1682年にアムステルダムにおいて刊行された。この第3巻中には問題の日本図が折り込まれているが，その大きさはTの原図より小型化され，縦21 cm 横32 cm ほどであり，これはWや1687年パリ刊本の図の大きさとほぼ一致する。しかも図はテキストがフランス語で書かれている。この図で㊦は同位置に計5艘存し，ただしこれらは（Wと同様の）ジャンク風帆船である。㊧は数字がやはり存し，しかも22まである。㊨は概してTと同じとってよい。すなわち全3行で，Tとフランス語タイトルは同文，体裁も同じく第1行が活字体大文字大字，第2行が活字体大文字中字，第3行がイタリック体（大文字小文字併用）となっている。しかもタイトル冒頭〈CARTE〉第1字上にイタリック小文字で〈a〉字が1字付される。そしてこのフランス語による地図の前には蘭文の，次のような印刷上の指示が存するのである<sup>69</sup>。

AANWYZING || Van de vertaling van verscheide be-|| zondere dingen,

in de nevensgaande Kaart in || de Fransche Taal uitgedrukt. Te stellen in || 't darde Deel, voor de Kaart, in 't begin || van 't eerste Boek. Fol. I.

[フランス語で書かれた添付地図中のいろいろな珍しい事柄の翻訳の指示。第3巻第1冊第1丁に、地図の前に入れること。]

つぎにカルトウーシュ中のタイトルの蘭訳がある。冒頭〈A〉は上述の〈CARTE〉上のイタリック〈a〉字に呼応するものであろう。

A Kaart der Eilanden van Japan, in de welk ook de || streek aangewezen word, die de Hollanders zo ter Zee, || als te Lant houden, om zich uit de stat Nangasaqui tot || Jedo, de woning van de Koning dezer Eilanden, te ver- || voegen.

[日本の島々の地図。その中にはオランダ人たちが長崎からこの島々の王の住居である江戸へ赴くためにとる海路も陸路も示されている。]

ついで地図内の説明の番号に対応して、1から22までの番号を有するオランダ訳が列挙されている。21は津軽海峡に、22は蝦夷島にあてられている(Wは21・22は番号を欠く)。参考のため、上で問題とした8つの説明文に対応する条を引用例示しておく。

1 : 2 Firando. Deze plaats was eertijts d'eerste woning der Hollanders.

[平戸。この場所は昔オランダ人たちの最初の住居だった。]

2 : 1 't Eilant, daar men alle de jeucht zend, die niet wil deugen, en daar men || hen door geuelt doet werken, tot dat hun naaste mogen hen van daar || trekken. [ろくなことをしない若者全員が送られる島、またそこでは親類が彼らをひきとるまで、彼らは強制的に労働させられる。]

3 : 10 Deze binnensee is achtiën mijlen lang, en men vischt 'er veel Salm. [この内海は長さ18マイルで、そこで大量の鮭がとれる。]

4 : 13 Okasaqui. Hier zijn de schoonste vrouwen van 't lant. [岡崎。ここに国中でもっとも美しい女性たちがいる。]

5 : 14 Bergen, altijd met sneeu bedekt. [いつも雪におおわれている山。]

6 : 9 In 't Lantschap Jammiscit, in 't gebergte, dat na aan Inaba is, zijn d'overvloedig- || ste zilvermijnen. [山城地方の中, 因幡に近い山脈中に, もっとも豊富な銀鉱山 [複数] がある。]

7 : 16 In dit Lantschap Bandel zijn ook zilvermijnen. [この坂東地方にも銀鉱山 [複] がある。]

8 : 20 Goutmijnen. [金鉱山 [複数]。]

またこの図にはカルトゥーシュ右わき, 上枠の下にイタリックで〈III. Deel. Fol. 1〉とある。これは1687年パリ刊本にもあった。

以上からただちにわかるように, W にみられる図中の数字は元来復刻した原図に存したものである。この原図はタヴェルニエ初版日本図元来のフランス語のテキストを有し, 大きさは (W と同じで) 縦21 cm 横32 cm ほど。九州沖の洋風帆船 2 艘のほかに, 日本海と太平洋に計 5 艘の船を描く。これらはジャンク風であろうか。説明文の数字は少なくとも 1 から 20 までは存在したであろう。カルトゥーシュ内タイトルはむろんフランス語で 3 行か 4 行からなり, 第 1 行は活字体大文字大字で, 第 2 行は活字体大文字中字で, 第 3 行あるいは第 3・4 行はイタリック (大文字は小文字併用) で, 〈江戸〉のみ活字体大文字であったろうと推量される。そしてこの原図は, オランダ語の翻訳本かフランス語の後刻本に綴じこまれていたのではなかろうか。この原図は, はじめ上述のような蘭訳本などの翻訳本中で使用すべく製作されたものが, のちにフランス語後刻本にも広げて用いられたのではなかろうか。このように, W とその初刊『日本誌』所収日本図の原図は, タヴェルニエ初刊本付載の日本図や T のごとき本来の大きさの図ではなく, のちに刊行された版に付載された小型の, フランス語による日本図であったと, 筆者には考えられるのである。

6 W と K の比較 本来の問題にたちもどる。W と K の比較を, W を基点として行なう。両者の基本的な事項をはじめに再確認しておく。冒頭の番

号は、比較の項目の通し番号である。

	W	K
①年 紀	1768年	1786年
②大きさ	21.1×31.6 cm	48.6×73.2 cm
③品質・形状等	銅版・無色	写本・著色
④カルトウーシュ・ タイトル・書き方	方形・4行(活字体+イタ リック)・年紀なし・分か ち書き(一部不完全)	リボン状・6行(筆記体)・ 年紀あり・続け書き

④の書き方につき注記する。W では2行目〈IC&XИМЪ[=И C&XИМЪ]〉, 3行目〈Isграда [=изъ града]〉を除き、ほぼ完全な分かち書きになっているが、コンマ・ピリオドを用いず、改行によってこれを代行する。これに対しKは一見続け書きである。ただし、コンマ・ピリオド・コロンが用いられ、かつ単語末の〈ъ〉の役目もあいまって、語の切れ目はよくわかるしくみである。また綴りに、略符号・アクセント記号が存し、上書きもある点は、地図内の表記法とも関連するが、これらの点については、後述する。

次に a) あったものがなくなった場合、 b) なかったものがある場合、 c) にもあるがなんらか変更された場合、 d) 同じく変更がない場合、に区分して列挙する。(冒頭の番号は上表からの続きである。)

a) 有→無

⑤ W の右下隅にある scale と説明文が K にない。

K は『北槎聞略』附図のひとつであり、他の附図でも scale は消去されているから、同じく消去されたものであろう。K の模写した原図 O では、存在していたのであろう (以下 O についてはあくまでも筆者の推定である)。

⑥ W の太平洋側の compass rose が K にない。

W では他に日本海側にひとつ、同じ形の compass rose が計2箇存在する。これに対しKでは前者1箇のみで、形状に変化がある。KがOの忠実な模写と仮定すれば、太平洋側での文字の配置と空間のなさから、Oでも消去されていたであろう。すなわち、Oでも compass rose は日本海側に1

つのみであったろう。

⑦ Wにある計7艘の船がKにすべてない。

Wでは九州沖に2艘の洋風帆船——ポルトガル船を表わす——が配され、日本海側に4艘、太平洋側に1艘のジャンク風帆船が描かれている。Oでもすべて消去されていたであろう。

⑧ Wで説明文の頭に付された1~20の番号が<sup>9)</sup>、Kにない。

この数字の起原は上述したが、Wに残存していた数字がKですべて消えている。Oでもおそらく存しなかった。すでに数字を付す意味がなかったからである。

⑨ Wにある海の名のひとつ〈ОКІАНЪ ВОСТОЧНЫИ〉が、Kではない。

Wでは九州・中国と朝鮮の間に〈МОРЕ || КОРЕЕР〉が、日本海上には〈ОКІАНЪ ВОСТОЧНЫИ〉が存する。Kでは、前者の位置にはなにもなく、かつ後者の位置に前者が後者にかわって〈МОРЕКОРЪЕРЪ〉と続け書き・大文字・花文字で記される。太平洋側は、文字の形式の変更のみで、同一名〈МОРЕ ЮЖНОЕ〉が記される。OはおそらくKと同様であったろう。するとカルトゥーシュ左脇の日本海の空間がひろくあいているが、ここはどうなのであろうか。なにか凡例等の記事が存在していたのか、あるいはする筈であったのか、不明としか言いようがない。

⑩ WにTからひきつぐ大きな地方名のうち本州内に表示された〈ІАМАІСОІТ / ІЕТСЕН / ІЕТСЕГЕН / КВАНТО / ОХІОР〉の5地方名が、Kにない。

九州と四国の地方名はKでも表示されているが、誤解・誤記がある<sup>9)</sup>。

cf. 九州——W : ХІМО || КО- || РОЛЕВСТ. || САІКОКЪ; K: Химо  
Королевство || Сайконъ Нанга = || саки. 四国——W : ТОКОЕСІ или ||  
(sic)  
УІКОКО остр.; K: Островъ || Котоези или Ксікоко. 〈長崎〉は別である  
(sic) (sic)  
筈だが、Kでは〈西国〉の次にこれらと九州の名がひとまとまりをなすか

のごとく書かれている。誤解である。Oでもこれらの表記はKに近かったのではないか。

⑪ Wで琵琶湖中に書かれていた説明文が、Kにない。

WにはTから継承した短文で、かつ頭に〈10〉の番号を有する説明文が存したが、Kですっかり消えている。Oでも同様であったろう。

b) 無→有

⑫ Wではなかった緯線・経線がKで海の部分にのみひかれている。

この事項に先立つ原因は、後述するように、図法の変更である。これは重要な変更である。むろんOでもKと同様であったろう。

⑬ Wではまったく用いないアクセント符、まれに用いる省略符を、Kで用いている。

Kではロシア語・日本語のロシア語綴りのうち若干の単語にアクセントを付する。次のようにカルトゥーシュのタイトルのロシア語ではダッシュの符号が存し、これはそのロシア語のアクセントに一致するゆえ、アクセント符とみてよい。

Кар'та, вне́йже, ознáче<sup>n</sup>, мо́рьмъ, су́хймъ, пу́тёмъ, Гала́н'цы, жи-

(sic)

(sic)

вѣтъ, остро́вѡвъ.

(sic)

短い説明文中にも例がある。

кото́рой, правѣнціи, блі́зь, Проли́въ

(sic)

日本語地名にも若干存する。

Иёссо [蝦夷], Иёдо [江戸], еті́го [越後], Квино=күни [紀伊ノ  
国], Яма́исѡить [山城]

語中からの省略符〈:〉は、WとKともに用いられるが、語中1字を省略する符号はWでは使われない。語末の場合、WはKとは別の省略符が1例、琵琶湖の説明文中で用いられる。

внѣ [=внемъ]

これに対し、Kではカギ印〈?〉がわりあい用いられる。正しいかどうかは

別として、意識として、jers の一方 (ъ か Ъ) が本来あるべきことを示すようである。次のようにロシア語にも日本語地名にも見られる。今省略符はアポストロフで代行して示す。

Кáр'та, Галáн'цы<sup>60)</sup>, провiн'ции,, Тондок'сiма [止々島] Кан'зукъ

[上野], Ут'шу [越中], Катайк'су [加太津?]<sup>60)</sup>

(sic)

O にはアクセント符はなかったのではなかろうか。ただ、省略符は存在したであろう。

⑭ K には朱筆で、地名あるいはロシア文字の読みが書き込まれることが多い。

むろん W には日本語は存しない。朱筆は、漢字表記の場合、右から左へか、上から下への順であり、読みがなは左から右への順である。この朱筆は、加藤優氏によると桂川甫周の手であるという。K 製作時での書きこみである。

例：太平洋は〈МОРЕЮЖНОЕ〉とあって、上に〈モレヨツノイ〉、右下に〈即南海〉と朱筆がある。

c) 変更あり

⑮ K は上端の経度のとり方を変更した。

W は左右枠に示す緯度の標示がともに下から〈32〉から〈40〉とある。経度は下枠で〈170〉から〈184〉まで、一方上枠で〈169〉から〈185〉まで標示される。これに対し、K は左右枠の緯度は数字を漢字にかえるだけで W と同じ〈三十二〉から〈四十〉まで。しかし、経度は漢字にかえて、下枠では W と同じ〈百七十〉から〈百八十四〉だが、上枠で〈百七十〉から〈百八十四〉までと変更されている。これは極言すれば、W で円錐図法風に日本図が描かれていたのが、K では円筒図法風に変更されて描かれていることを意味する。したがって図の左右上方がもとよりひらくかっこうになる。よって、K では隠岐島下方の山陰の入江が上に直線的にひらくように描かれるし、南部の東端は右枠からはみだして描ききれていない。ところ

が、Kの図形をよくしらべてみると、実際はややずさんに描かれたとみられる。たとえば、能登半島東端はWで179°経線に接するはずであり、その下方の越後の大河は切れ込みが179°1/3ほどの経線に沿うはずである。ところがKでは前者は約178°2/3の線に接し、後者には179°の経線が描かれている。すなわちこの部分でKは1/3°ほど西へずれていることになる。さらに朝鮮にいたっては乱暴で、経度を無視している。Wでは海岸線の上端が168.5°に接するのだが、Kでは169.5°に接している。円筒図法では描ききれないが、図としては朝鮮が必要なことから、左端に位置させたのであろうか。図法を無視することはなほだしとしなければならず、日本図のラフさかげんからも、正確に円筒図法の手法によったのか、いささか疑問といわざるをえない。OもKと同じであったろう。

⑯山のけばの施し方が変わった。

前項と同じく、もとの図とはちがうことを積極的に示そうとしたのか、両図ともにみられる山に、Wではあたかも図の左上から光があたった如く、山の右側一方がけばを施されている。ところが、Kでは光は図の上方からきたごとく、山の左・右両側にけばが施れている。OもKと同様であったろう。

⑰五島列島の位置の標示が異なる。

Wでは、平戸のある島の下方端の先につらなる連山形の島を、五島列島と標示しているが、Kは朝鮮島の一部ないしは済州島をそれとし、短文〈Ост: и города || гото〉<sup>69</sup>を付して、島内に朱で〈五嶋〉と標示する。Wで上と同様の短文(頭に3の数字を付す。また最初の語には〈Остр:〉と略す)が、末尾〈Гото〉を島に接して存するが、その先頭が朝鮮島下端に接しているため、おそらく誤認してのものであろう。したがってOでも同様だったろう。

⑱主要な町を示すマークが異なる。

Wでは当時ヨーロッパで通行した砦風の建物のマークを用いる。このマークの建物は中央に円をもち、まんやかにやや高めの塔、左・右脇に低めの

塔を配したもので、それぞれの塔上にポールがつきでる。町の規模に応じて形と大きさがことなる。これに対し、Kはマークの図柄がことなり、しかも朱で描かれている。図柄は基本形に還元すれば3種で、江戸・上野・尾張・京・長崎の大きな町は2ないし3の尖塔をもつひとままとまりの建物であらわす。中位の町は屋根をもち、その上に煙突(?)をもつ建物で、最小の町は右脇に小構造物をもつ小さな円塔であらわされる。後2者は屋根ないし塔上のポールを有し、そのさきにあたかも右むきの三角旗がひるがえるかのごとき形が与えられている。前者では尖塔上に直接上向きの三日月形が付される。三日月はサラセンのマークであり、異教徒をさすのであろうか。今のところ確証がないが、第1・第2のマークはOにおいて変更されたものとみる。第3のマークは、中央の丸がないものの、Wで用いられる汎ヨーロッパ風のマークのひとつと同源とみられる。すなわち、Oがその原図からひきついだものだろう。Kにおいて町が朱で描かれているのは、Oでもそのようであったか、あるいは無色の線描に朱で彩色されていたのであろう。これは、ヨーロッパ製地図においてしばしば町のマークが手書きの朱で塗りつぶされる手法の延長線上にあることと考える。なお両図ともに2ヶ所ほどに見張所としての塔がでてくるが、ともに上に鋸歯をもつ円筒状の塔風に描かれている。

⑩全体に用いられる書体および字体が異なる。

第1に、Wは銅版で、用いる書体は活字体とイタリックである。これに対しKは一字一字独立させて書いているとはいえ、全体に筆記体である。Wは前述したように、カルトゥーシュのタイトル前半と後半中の地名〈江戸〉、さらに海洋名・大きな地方名を活字体大文字で表記する（海洋名の一部と〈IAMAICOIT〉は大文字のイタリック）。他は大文字・小文字併用のイタリックである。一方、Kは海洋名のみ大文字筆記体の花文字であり（しかも一方の〈MOPE〉のMの一画には十字架が飾りとしてある）、他は大文字・小文字併用の筆記体が用いられるが、しばしば大文字か小文字かの判定に苦しむ（たとえ

ば、語中で〈a〉よりも〈Λ〉が用いられる。)これらの筆記体を行書風とすれば、江戸参府の海路・陸路図に沿う地名は、草書風の文字が使用されるが、これも一字一字をほぼ独立させて書く(この部分もWはイタリック)。

第2に、Wは古い字体〈s・ʒ・IA/π・γ・ε・ν・ω・π・π・N〉を多用し、また〈й〉を用いない。これに対し、Kは前者を各々〈з・у・я・кс・e・i/v/y・o・к・в・н〉に書きかえ、また〈й〉を使用するのが原則である(ただし例外あり)。ただし〈N〉は〈H〉と共存し、とくに海路・陸路沿いの地名表記では、18世紀風の草書筆記体が散見し、またここでは〈π・π〉も用いられる。たとえば、〈Фиросіма [広島]〉の〈p〉はラテン文字の〈l〉の筆記体のように丸の部分が細長い文字で書かれ、岡崎に付された説明文末の〈женской〉は、〈ж〉があたかも〈л〉の筆記体上端に前方からうしろむきに大きなひげかざりを加えた形の字体(ただし当時はポピュラーであった)<sup>69</sup>で書かれる。またKで特徴的なのは〈p〉で、丸みの終端がまきこまれて、丸の中央に左からつき出るか横断する<sup>69</sup>。あるいはギリシア文字〈β〉ふうに、丸の上方にくびれと、終端の巻き込みがみられる。海路・陸路沿いの地名表記を除けば、Kは字体に関しては現代風であり、Wは古風であるといえよう。Oでもこの事項に関してはKと同様であったろう。なお、Kでは地名において随所に文字の誤りがみられるが、これはOの原図が小さかったために文字が読みづらく、また日本地名の知識がなかったために類似の字体、とくに〈и・н・к/п・п〉などを誤認した結果であろう<sup>69</sup>。例——K: Ланта, Дена, икаба. cf. [同順で] W<sup>69</sup>: Анита [秋田], Дена [出羽], инаба [因幡]。さらに〈б/г/в〉の誤読なども存在し、例はかなりみられる。なおキリシタン系の綴り〈x〉にさかのぼる〈y〉は、Kで完全に〈кс〉に開かれて表記されていることは前述した。

②⑩カルトウーシュおよび説明文のロシア文で、文体・表現・綴り・表記法等に異なりがみられる。

まず、i) Wは、若干の例外はあるものの、ほぼ完全な分かち書きであ

る。ただし文中にほとんどコンマ・ピリオド等を用いない。これに対し K は文中にコンマ・ピリオド等を用いるが、反面つづけ書きといってよい。

ii) 綴りにおいて、〈e/ѣ〉と〈и/i〉の使い分けで異なりがみられる。例

— K : Корѣрь, мѡрѣмь, живѣтъ, или. cf. W : Корееръ/КОРЕЕР, МОРЕМЪ, живетъ, или. 朝鮮の名以外では、正書法上 W が正しい。iii)

K に〈o/a〉の発音上の混同による綴りがみられる。K : Галán'цы, галанцы, правѣнци, cf. W : Голландцы, голандцы, провинци. 正書法上 W

が正しい。iv) K で発音を反映した綴りがみられ、W で古い綴りがみられる。K : Галán'цы, голанцовъ, галанцы. cf. W : Голландцы, голандцов,

голандцы. / W : восметъ, слатая, cf. K : возметъ, златая. v) K で教会スラヴ語形とロシア語形の、さらに〈e/ѣ〉と〈я〉の混同による綴りがある。

K : сребрѣныя, сребренная. cf. W : серебряныя, серебряная. 正しい教会スラヴ語形は W の綴りであるが、ロシア語形で〈серебрeный/серебряный〉,

さらに両者の混同形〈серебрeный〉がある。なお、W には佐渡に〈сребрин:〉なる綴りも存する (K になし)。vi) 〈изъ/въ〉+名詞/代名詞を

W は前置詞末の〈ъ〉を脱落させてひと綴りに綴るのに対し、K はつづけ書きながらも〈ъ〉を綴る。W が古風な綴りである。W : Isграда, вгородъ,

Впровинци, вгорахъ. cf. K : изъграда, въгородъ, Въправѣнци. ただし坂東の説明文中ではともに〈всеи[=въ сей]〉とひとつに綴る。vii) おもに説

明文書において、教会スラヴ語の動詞不定形語尾〈-ти〉, 3人称単・複数語尾〈-ть〉を W が保持するのに対し、K はロシア語形の各々〈-ть〉と

〈-ть〉を有する。W : работати, ѡсылаѣтъ, нехотятъ, приѣзжатъ. cf. K : равотать, ссылаютъ, нехтятъ, приежатъ. ただし対島の説明文末で

W は〈восметъ〉, K は〈возметъ〉とともに〈ъ〉を綴る。教会スラヴ語形を用いる方が古風である。viii) K に語や表現の言いかえがみられる。対

島の説明文中、W の動詞〈ѡсылаютъ〉と関係代名詞〈кѡрые〉はそれぞれ K で〈ссылаютъ〉〈кои〉でおきかえられているが、ほぼ同意であって、こ

れはさほど意味はなかろう。ただカルトウーシュ中の〈IAKO…TAKO I〉は、Kで〈какъ…такъ и〉と現代風に言いかえられている。この事項に関し、Wは古風であり、Kは現代風になっていると判じられる。以上⑳については、おおかたOはKと同様の状況であったろう。

㉑ Kの説明文中に綴り誤りと脱落がみられる。

たとえば、対島の説明文はKに次のようにある。前掲Wの同文を参照せよ。分かち書きで引用する。

Островъ въ котóрой ссылають мо || лодыхъ дѣтеи кои нехтятъ ра= ||  
вотать, гдѣ принуждаютъ || работъ силою: до тѣхъ ли= || дондеже  
изъ ближнихъ срод||никовъ кто ихъ возметъ [.]

ここでは〈нехотятъ работать〉が誤って綴られ、次の〈принуждаютъ〉のうしろに〈ихъ〉が脱落し、〈до тѣхъ ли=〉は後半が脱落している。〈рабо-〉を〈раво-〉と綴るのはロシア人らしくない。〈работъ〉は〈работать〉とあるべき。また意味をなさない〈ли=〉も、〈л〉と綴りはじめていることから、元来〈мѣсть〉とあるものを(〈до тѣхъ мѣсть〉すなわち〈до тѣхъ поръ〉の意)、スペースの関係からかあるいは別の理由からか、K模写時に脱落したものではなかろうか。すくなくともこれらふたつは模写時における筆者によってなされた誤りであろう。

㉒ Wでは主に説明文中で語頭・語中・語尾で上書きが用いられ、Kでは主にカルトウーシュおよび地名において語中・語尾で上書きが用いられる。例は割合する。OはKと同様であったろう。

d) 変更なし

㉓両者ともに金・銀山の注記を有する。

ただし、Wは仙台と石見に金山、佐渡・坂東・山城に銀山の注記があるが、Kでは佐渡のそれがぬけている。なお銀山の綴りについては上述したが、金山の綴りも次のような異なりがある。Wは仙台で〈слатая руда〉、石見で〈златая руда〉とあるが、Kは各々〈златая руда〉〈золотая руда〉

とある。〈злат〉と綴るのが教会スラヴ語形、〈золот〉と綴るのがロシア語形である。

7 Kの原図O 以上縷々W・K両図の比較を行なったが、これらからKが模写されたその原図がいかなるものであったかを、導きうるのだろうか。

Oは手書きの拡大模写図ではなかったか。カルトゥーシュ末に製作年のみならず、月日まで記入することは、書物内に添えられる付図という性格にそぐわず、独立した一枚物であったことを示唆するのではないか。だがこの一枚物は、ロシア語テキストの全体が筆記体によって書かれていること、印刷物に固有の活字体の文字が何ら存しないこと、図として装飾性をたかめる船などの絵がみえないことなどから、印刷されたものとは考えにくい。町のマークも手書き風である。

さて、その原図は『日本誌』所収日本図であったろう。すなわち、1786年ひとりのロシア人が、タヴェルニエ・カロンの抜萃露訳である『日本誌』中の銅版日本図を、何の目的があつてかは不明だが、縦横ともほぼ2倍に<sup>68</sup>、図法を変えて拡大し、模写した。色彩をほどこし、山々のけばを変え、町のマークを変えて描き、地名・説明文等を当世風に筆写してゆく。その際、場所の誤認や文字の誤読・誤写が生じた。本州部の大きな地名や琵琶湖内の短文を脱落させた。海の名は日本海側にひとつの名のみを採用し、原図にあった船すべてと、太平洋側の compass rose をはぶいた。scale は描いた。ただし右下がせまいから、もしかすると左上に移動したかもしれない。カルトゥーシュを新しいデザインに変え、タイトルは原図のそれをほぼそっくり当世風に筆写し、製作年を付加する。緯線・経線を陸地やカルトゥーシュにかからぬようひく。5月1日に完成した。

カルトゥーシュ内の〈сочинѣна〉およびKの題箋中の〈魯齊亜国人製〉という文言は、KすなわちOの独自性を結果的に反映するものと解される

が、これは主にかかる図法変更による拡大模写を根拠とするのではなかろうか。

Oが某ロシア人製作の手書き拡大模写図そのものであったか、あるいはその写しであったか分からない。また、そのいずれにせよ、いつ、どこで、どのように大黒屋光太夫の手にわたったのであるか、これまた不明としなければならない。その際、この日本図が遣日使節によって日本側に贈られた地図の一枚であった可能性もあるだろうが、筆者は光太夫が持ち帰ったものとする。 (次節参照)。

光太夫帰朝(1793年)後、桂川国瑞によって『北槎聞略』が編集され、1794年に幕府に献上された。その際、いったん幕府に召し上げられていたであろうこの図も同寸で模写されて、本編に添えられた。作図は専門家によったであろう。この時点でscaleは、他の模写図同様、無視して描かれなかった。ロシア文字は、作図者とは別人の、ロシア文字を書き慣れた者によって書き写された。その際、ロシア文字の写し誤り・語の一部の脱落などが若干生じた。ロシア文字の書き手は光太夫の可能性がもっとも高いと考えられる。最後に、桂川によって朱筆で、地名は漢字で、ロシア文字の読みは片仮名で書き込まれた。

なおWのカルトゥーシュの記載から、1786年頃に刊行された『日本誌』第3版などの存在も想定し、Kの原図をその所収図に求めようとする見解もある<sup>99</sup>。もしそうであれば、この図は印刷物であり、大きさも第2版と変らなかったであろう。上述の理由により、筆者はこの見解に否定的である。

**8 2つのエピソード** Kの原図Oが遣日使節の贈与品中に属さず、光太夫が持ち帰ったものとするを上述したが、これには理由が存在する。どうやら光太夫は滞露中にこの図を見ていたとおぼしい。光太夫はロシアにおいて3点の日本図を描いた<sup>100</sup>。第1は1789年イルクーツクで作製され、第2・第3の2図は1791年サンクトペテルブルクで作製された。その大きさは

各々、65.5×126.5 cm, 64.5×137 cm, 66×124 cm 前後である。これら3図は今日ゲッチンゲン大学図書館に蔵されている。光太夫は『享広大節用集』(享保14(1729)刊)に付載する〈大日本国之図〉の系列に属する図にのっとり、これを拡大し手書きで模写した。諸国名を漢字・仮名で示し、鑄造の城のスタンプを捺して城下町を標示し、地名を漢字・仮名で書く。これに第1・第2の図は他のロシア人によってロシア文字で地名の読みが書き加えられ、時に短文の説明文が書き加えられた。3図とも紙本著色である。これらの地図中に、金・銀山の標示と説明が存在し、さらに大島の御神火をさす〈火〉の文字も書き込まれている。これらはタヴェルニエ流のO(あるいはWやその初版所収図)に関連するのではなかろうか。すなわち、Oを見ていてこれら日本図を描いたか、あるいはロシア人にはタヴェルニエ風の地図による日本図でのイメージがつよく、そこに誌されていることの一種の規範性が作用して、光太夫にもそのような記事を日本図内に書き込むことを要求したのではなかろうか。

もうひとつ、高野明が紹介した事柄につき<sup>64)</sup>、再びここにひく。1853年長崎に来航した遣日使節プッチャーチン提督には、秘書官として文豪ゴンチャローフが従っていた。彼はのち『フレガード“パルラダ”』(1857年初版)<sup>65)</sup>を著すが、そのなかで船中上述の『日本誌』を愉快地読んだことをしるしている。どうやらこの書物はその方面での必読書であり、また著明な本でもあったようにみうけられ、したがってここから所収日本図もまた有名な地図であったと推察されるのである。

むすびに 本稿では「皇朝輿地全図」の原図がいかなるものであったかとの問いに対し、『日本誌』所収日本図と比較検討することにより、その手書きの、別図法による拡大模写図であったと答えるものである。また前おきとして、『日本誌』所収日本図とタヴェルニエ日本図について、その関係も検討し、前者が後者の後刻版によると想定した。「皇朝輿地全図」の原図が見い

だされることを切に望む。

[付記] フランス語とオランダ語についてはそれぞれ宮内芳子さん、Isabel Tanaka van Daalen さんにご教示をえました。また、写真掲載に関し、国立公文書館、早稲田大学図書館、およびライデン大学図書館の許可をえました。記して謝意を表します。

N. B. Thanks are due to Drs. D. De Vries, Leiden University Library, for permission to use the photograph.

#### 注

1. 函架番号185・579。なおこの本は將軍への上呈本であったろう。
2. 以下翻字に際し、小文字中の A, e, Nなどはそれぞれふつうの小文字体 a, e, Hに変える。||は改行を、[ ]は補いを示す。
3. なお、Kの特異性、その成立や伝来等の諸事情については、文化庁の加藤優氏が論文発表を予定しているとのことである。同氏は『北槎聞略』に附された地図が、最初は11枚ではなく、10枚だったのではないかと考えている。
4. 同書解説52ページ。
5. 第2刷、昭和40年刊。第3刷、平成元年刊。ただし、内容がややふくらんでいるが、基本的には同一である。
6. 函架番号 AE・3123。
7. 高野明〈ロシア最初の日本関係文献考〉(日本ロシア文学会会報第7号、日本ロシア文学会、1964年)、同『日本とロシア——両国交渉の源流——』、1971年、紀伊国屋書店。
8. 第3巻のタイトルは亀井高孝が書いたところと同じである：RECŪEIL || DE PLUSIEURS || RELATIONS || ET || TRAITÉZ || SINGULIERS ET CURIEUX. || [……]。
9. 幸田成友訳著、フランソワ・カロン原著『日本大王国志』(平凡社、昭和42年)の付録〈其二 日本大王国志の写本及び版本〉を見よ。
10. 『日本とロシア』24ページ以下。
11. В. И. Межовъ, Библиографія Азіи, т. I, СПб., 1891.

12. M., 1965.
13. 大きさ約縦20×横13 cm.
14. ただし次につづく挿図の位置 (ページ) の記述は不正確である。
15. 高野訳, 同上書 29ページ。
16. 天理図書館の神崎順一氏よりの回答による。なお, 同書は目下整理中であるとのこと。
17. NをH, eをeとする。
18. 後節〈WとKの比較〉を参照せよ。
19. 3行以下はイタリックであるが, 引用ではローマン体に変更する。なお, 写真2参照。
20. 古体のロシア文字のうちヴァリアントの〈o〉〈u〉はそれぞれ〈b〉〈k〉になおす。ただし上書きはそのまま。
21. いわゆる岡崎女郎衆をさすのであろう。
22. 早稲田大学図書館所蔵, 1669年アムステルダム刊本 (函架番号AE・3109) による。略題紙には次のようにある: GESANTSCHAPPEN AEN DE KAISAREN VAN IAPAN. なお, 同館には1670年ロンドン刊英訳本, 1670年アムステルダム刊独訳本, 1680年アムステルダム刊仏訳本等が蔵されている。ただし独訳本は地図が脱落している。
23. 独訳本1本が千代田区図書館の内田文庫に蔵される。他の版についても次を参照せよ: 『内田嘉吉文庫稀観書集覧』, 故内田嘉吉氏記念事業会, 昭和12年。
24. 神戸市立博物館所蔵本による。
25. パリ刊とあるが, 刊行地と印刷場所とはことなっていたのであろうか。当時, ベルギー・オランダは印刷出版業の一大地であった。なお蘭訳本 (後述) との関係も考えなければならない。
26. 〈r〉は〈s〉にかえた。
27. 幕府の政策上, 距離が明らかにされるようなものは削除されたのであろう。
28. 〈5・8・17〉の数字が脱落している。
29. Kは対照のために分かち書きで引用する。
30. きわめて発音的な綴りである。正しい綴りは〈голландцы〉。
31. 参考文献2の114, 116ページ参照。
32. 〈города〉とつづけて綴る。なお, 〈Остр:〉と略して書くのはロシア人らしくない。cf. W〈Остр:〉。この略し方はKの模写時に生じたものか。
33. 18世紀の筆記体の種々なヴァリアントは, 光太夫が持ち帰った習字帳の精巧な次の写本によってうかがい知ることができる: 鷹見泉石写『魯西亜国字学』(1787年モスクワ刊本を文化10年(1813)に写したもの。古河歴史博物館蔵)。参照: 岩井憲幸〈鷹見泉石旧蔵ロシア語関係資料若干の覚書〉(古河歴史博物館紀要「泉石」第1号, 1990年11月)。光太夫もヴァリアントを知っていたし, いくつかは

自分でも使っている。書き方は、馬場位十郎や足立左内・鷹見泉石に伝えたようである。次のものも参照せよ：岩井憲幸〈天保年間に書きしるされたロシアの諺となぞなぞ——鷹見泉石旧蔵の資料をめぐって——〉（「窓」第67号，ナウカ，昭和63年12月），同〈伊勢若松緑芳寺蔵大黒屋光太夫遺物「箴言」について〉（同上誌第78号，平成3年10月）。

34. 光太夫の筆蹟においても観察できる。
35. 他に〈Ксидамба=масть, Киватаць〉のように，なぜか語尾に〈-ць〉を付加する例がある。むろん W には存しない。
36. 引用に際しイタリックからローマンにかえる。
37. 〈ь〉につき一言する。W では本来語末が〈ь〉と綴られるべき語を〈b〉と綴る例が多数存在する。
38. 実際には 2.3 倍強か。
39. 神崎順一〈天理図書館所蔵資料を中心とした西洋古版日本地図目録 1528—1800〉（「ビブリア」第101号，平成5年6月）の注(1) (p. 199) を見よ。
40. 参照：岩井憲幸〈ゲッチンゲン大学蔵大黒屋光太夫筆日本図について——書誌学的・文献学的研究——〉，明治大学教養論集第269号，1994年12月。
41. 高野同上書32ページ。
42. 高野明・島田陽共訳『ゴンチャローフ 日本渡航記』，（雄松堂書店，昭和44年）として訳されている。なお195ページの訳注も参照せよ。

参 考 文 献      \*注であげたものは再掲しない。

1. 高橋正〈ニコラ・サンソン『アジア』における日本〉，「大阪大学日本学報」第2号，1983年。
2. 同〈ニコラ・サンソン「日本図」(1652)の地名〉，同上誌第3号，1984年。
3. 同〈西漸せる初期日本地図について——I. Moreira 系地図を中心として——〉，同上誌第4号，1985年。
4. 同〈17世紀日本地図におけるティシュラ型とモレイラ型——N. サンソンと R. ダッドレーの場合〉，同上誌第6号，1987年。
5. ルッツ・ワッター他『西洋人の描いた日本地図——ジパングからシーボルトまで（図録）』，OAG ドイツ東洋文化研究協会，1993年。